



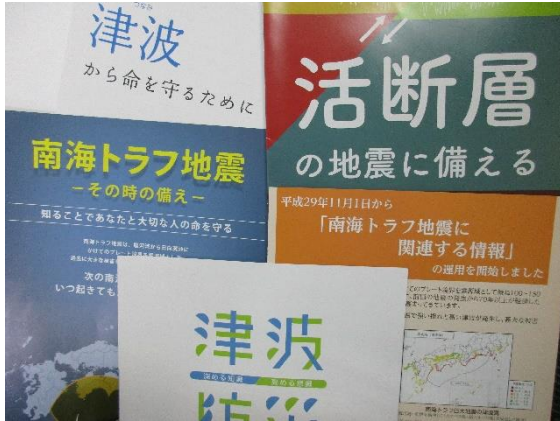
やかただより

広川町
全戸配布

第107号
令和元年9月

「南海トラフ地震」への備え

今、稲むらの火の館にはたくさんの地震・津波に備えるための資料を置いてあります。ご自由にお持ち帰りいただける資料です。和歌山地方気象台からいただいたものです。少し転記します。



南海トラフ地震が発生したら・・・

地震の揺れを感じたら身を守る行動を

家庭で 頭を保護して机の下などの頑丈な場所に隠れましょう

屋外で ブロック塀や電柱、自動販売機など、倒れる危険のある場所から離れる

沿岸部で 津波の発生・襲来に備えて、安全な場所に避難する

地震は一度で終わらないかも(時間差で起きる場合もあります) 1854年の安政地震では11月4日に東海地震が起こり、約32時間後の5日に南海地震が起こり、広村に津波が来たのです。

昭和には、19年に東南海地震が起こり2年後の21年に南海地震が起こりました。

津波の特徴を知っておきましょう

地震で海底が動いて、その上の海水を押し上げ津波が起こるのです。

津波は海の深いところではジェット機ぐらいの速さ(時速800km)で広がります。海岸に近づくと遅くなりますが、波が急に高くなります。津波を見てから逃げている間は間に合いません。

これらの資料は、稲むらの火の館に置いてあります。興味のある方は取りにきてください。

「ウォーターメーカー」

いただきました

「ウォーターメーカー」をいただきました、と言っても意味が分からないですね。水を創るという意味ですからね。ENELL株式会社が開発した水を創る装置です。何も無いところから水を創り出す装置です。つまり、大きな災害が起こったら、水道管が破裂して水が出ないというニュースはよく聞くことです。そんな時、この機械が役に立つのです。空中にある水分を取り込み、水を創り出し、飲み水が確保できるというものです。1日、最大33リットルの水が精製され、災害時には車のバッテリーから取り込めるので、停電でも作動するということです。避難所等で多量に必要な場合は、井戸水等を給水すると装置内のフィルタにより真水になり、飲料水になります。

水質は軟水で、飲みやすい水です。最近、来館される皆様も試飲され、たいへん好評です。



現在、和歌山県には1台のみの設置です。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
＜第12回稲むらの火講座＞

先月号でお知らせしましたが、第12回目の稲むらの火講座を下記により開催いたします。

日時 9月21日(土)午後1時30分

場所 稲むらの火の館3階

講師 米山 正幸先生(北淡震災記念公園)

演題 「野島断層からのメッセージ

～震災といのち・人とのつながり～

聴講の定員は90名です、お早くお申込みください。電話 0737-64-1760へ。



広小學校で交流授業を実施しました！

「子ども梧陵ガイド」の事前学習の一環として、関西大学近藤ゼミと龍谷大学石原ゼミの学生と、広小學校の6年生が交流授業をおこないました。

授業では、まず、大学生と児童がそれぞれの自己紹介をして親睦を深め、次に大学生が、大学とゼミの紹介をおこないました。その後、ガイドに向けた事前学習として、児童はひとりひとり自分の“CREDO (クレド)”を考えました。これは、防災に対する「前向きな約束」のことです。

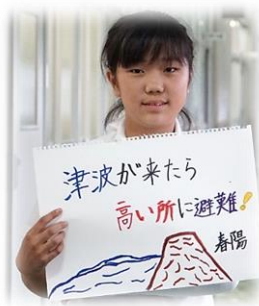
「八幡神社に避難する」、「お年寄りに声をかけながら避難する」、「津波が来たら一目散に高台に逃げる」といった、頼もしい宣言をしてくれて、大学生も学びの機会となりました。

児童のみんなには、この「約束」を胸に、充実した夏休みを送ってほしいと思います。

こども梧陵ガイドとは？

あらためてご紹介しますと、「こども梧陵ガイド」とは、広小學校の6年生が、稲むら火の館で来館者をまえにして防災に関するクイズを出題してガイドをおこなう取り組みです。2016年度にスタートして、今年度で4回目の実施となります。夏休みが明けた2学期に、児童と大学生でスペシャルな防災クイズを考案します。ガイドの開催日は11月16日(土)と17日(日)の2日間の予定です。

児童たちは、ふるさと広川町にとっての「未来の梧陵さん」です。ぜひ、町民の皆さまも、「稲むら火の館」に足を運んでみてください！



『安政聞録』翻訳文 (その7)

原作・古田 詠処 養源寺蔵

西側が最も被害が大きく、浜町の西側は残らず流亡し、南側はわずか5・6戸残るのみであった。吹田宅は宝永の災害でも残り、また今回の災害でも残った。三町共半壊はもちろん鳥かごのような状態になったが、不思議なことであった。また九部浜などもあったが原形をとどめず、広の地は凸字形なので田町の中腹くらいの家は、床下まで津波が上らない家もあった。その他はみな床上より30センチ～90センチの所まで水が上っていた。中町にいたっては150センチや180センチ、もちろん中腹の家は被害が軽く、田町と同等と考えてよい。浜町に関しては屋根より上に水があがり、詳しくは前回に記した。崩れた家もそれぞれ記した。道具も雪隠も人も入り乱れ、山のようになり、東西にも分けられず、目も当てられぬ状況であった。その後だんだんと人が戻ってきて、ある人は死骸を探しだし、とうとう見つからなかった人もいた。また、相当日数を経て、漁火などの時に沖で網にかかり、見つかった死体もあった。またたびたび磯辺へ行き、じっと見つめて探す者もいたが、混乱の中で葬式も行なわれず、質素に済ませた。また財宝や諸道具を掘り出そうとしたが、すべて泥まみれになっていた。また瓦を集めて道をなおし、家を掃除して、数日経ってようやく人が行き来するようになった。我が家は明王院にて一間の座敷を用意してもらっていたが、今朝下男を見回りに行かせたところ、家の蔵は壁が崩れただけで、大きな被害はなく家は少々傾いていた。もっとも表の土塀はこのらず崩れ、波は90センチほど上った跡があった。高い戸棚に入れておいたものは別状がなく、下に置いていた物は戸棚・押入れの区別なく流され、残っていた者も散乱していた。借用物は前々より蔵の二階に置いていたため、無事であった。蔵は入れたまま、すき間から潮が出入りしたと見えて庭はぬれていて、家は空けたまま逃げ出したために被害は少なかった。

(つづく)

